一夏会報

No.69
令和元年11月1日
発行：鶴見大学
〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3
TEL.045-574-8623（ダイヤルイン）
https://www.tsurumi-u.ac.jp

鶴見大学 学長
大山 喬史

「為さざるなり。能わざるに非ざるなり」（孟子）

「できないのは、やろうとしないからだ。できないからではない」

底知れぬ「後悔」に沈み込むこと数知れない我が人生。「やれること、やるべきことをしなかった」これが一番の後悔、後に戻れない後悔。そして「やったけれど、上手くいかなかった」その苦しみ・悔しさが次の後悔。「失敗が自分を駄目にするのではない。失敗にこだわる心が自分を駄目にするのだ。実践躬行に弛まず努めるのが正道だろう！やらない後悔、やってみての納得」と自問自答。そうして、いつか「七転び八起き」と立ち上がれる時が来ようというもの。これが正に、孟子の言はんとするところと解す。

「志立たざれば、舵なき舟、銜なき馬の如し」（王守仁）

「志の立たないものは、舵のない舟、くつわを嵌めていない馬のようで、ふらふらして進路が定まらない」

「呻吟語」（明の碩学・呂心吾）が「志」の真意を説いている。

「貧、羞ずるに足らず。羞ずべきは是れ貧にして志なきなり。

賤、悪むに足らず。悪むべきは是れ賤しくして能なきなり。

老、歎くに足らず。歎くべきは是れ老いて虚生するなり。

死、悲しむに足らず。悲しむべきは是れ死して聞くなり」

確かにこうした先知先哲が示唆する「志」、言われてみれば素直に納得させられるが、その実践躬行となると、どの一つをとっても容易なことではないことを味わってきた。

言志四録（佐藤一斎：岬龍一郎訳）が、「志」について明言している。

「人は、この志を立身出世することと思っているようだが、これは間違いである。たしかに志を持った結果、立身出世する場合もあるが、それは結果であって、本来の意味は心の立派な人になろうとする意志である」

「少年よ、大志を抱け」（クラーク博士）。よく耳にしてきた。でも「末は博士か、大臣か」と長らく曲解してきたように思う。実はこのフレーズの後に「それは金銭を求める大志であってはならない。利己心を求める大志であってはならない、また世に言う名声、虚しいものを求める大志であってもいけない。人が人として身に備えるべきことを達成せんがための大志を持つべきである」と続く。

「志」の字面から「十の内一を全うしようという心意気」と読み込んでいる人もいるようだが、頷ける解釈とも思う。

農政や殖産、学問振興など米沢藩の改革を積極的に進めた藩主、上杉鷹山は師の細井平州の薫陶を受けた中で、次のような座右の銘を残している。

「為せば成る　為さねば成らぬ何事も　成らぬは人の為さぬなりけり」

「勇なるかな勇なるかな、勇にあらずして何をもって行なわんや」

「志」の真意は、先ず抱いて、その志を厭きなく追い求め、実現してゆこうとする気概かと思う。さすれば、そうした気概を呼び起こさせる風土づくりを担っているのが、正にリーダーであり、今でいう「リーダーのガバナンス」と気づかされる。

山本五十六の言葉「やって見せ　説いて聞かせて　やらせてみ　讃めてやらねば　人は動かじ」、さらに「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず」「やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず」と続く。任用した者の「志」を確たるものへと啓発、俎上に引き上げ協議し、そうした中での相互理解・信頼関係を構築、そうして実践躬行へと移行する。そうした風土づくりこそ、リーダーの責務であると明言している。

箴言をまのあたりにする度に「こは苦なり」、さてはて「こは苦の滅尽に至る道なり」と諦念。

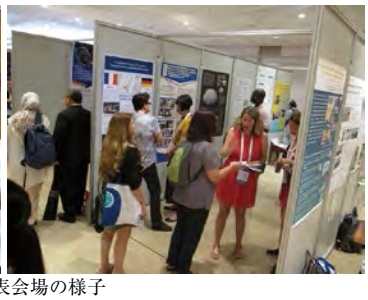
国際図書館連盟２０１９年次大会（アテネ）報告

鶴見大学司書・司書補講習
主任教授
角田 裕之

司書・司書補講習の修了生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。今年の講習期間は、冷夏から始まりその後に猛暑が続き、体調管理に気を使われた方が多かったのではないでしょうか。さらに、大型の台風に見舞われ、授業時間割の変更があり、授業の準備に苦労されたのではないでしょうか。皆様が本一夏会報を手に取られている頃は、いくぶん過ごし易くなっていることと思います。さて、司書資格を取得するには、必修が十一科目で二十二単位、選択が二科目で二単位、合わせて十三科目で二十四単位を取得する必要があります。大学や短期大学で司書資格を取得するには、四年間あるいは二年間に渡り段階的に学習します。ところが、司書講習で取得するには、僅か二箇月間で修了しなくてはなりません。よって、授業時間割も一日に四時限まで、あるいは、五時限まで続くことが多くありました。本講習を修了するには、盛大な学習意欲、強靭な精神力と体力が必要とされます。目標を達成できたのは、講習生ご自身の努力はもちろんですが、ご家族のご理解やご協力、講習生同士の励まし合いも大きな支えとなったことでしょう。

さて、ここから、世界の図書館活動の事例をご紹介したいと思います。今年の夏、私は司書補講習「レファレンス資料の解題」の後に、国際図書館連盟（ＩＦＬＡ）が主催した年次会議で研究成果を発表するために、ギリシャの首都であるアテネを訪れました。会議は八月二十五日から三十日まで開催され、百三十ヶ国から図書館員や大学等の教員が三千三百人以上集まり、本講習の講師の先生方も五名が出席されました。今年のテーマは、Libraries: dialogue for change（図書館：変革のための対話）です。図書館で表現の自由を擁護し利用者へ情報を伝えるには、利用者との対話が重要です。アテネは民主主義の発祥地でもあり、対話はその基本的な要素でもあります。アテネで開催された大会のテーマとしてとても相応しいです。ＩＦＬＡの年次大会では本大会に先立ち、分科会が開催されます。分科会はＩＦＬＡの中心的な組織で十名程度の委員で構成されています。私は今年から教育研修分科会の常任委員に選ばれ、各国の司書養成の教育・研修の調査や世界的な司書の基準を審議することになりました。

また、本大会では二百五十のセッションが開催され、二百のポスター発表がありました。日本からは、大阪市立大学の村上晴美先生による国立国会図書館件名標目表と米国議会図書館件名標目表の調査システム（A System for Exploring NDLSH and LCSH Headings）、相模女子大学の宮原志津子先生によるiPadアプリケーション「PeKay」を使用したコミュニティ情報ガイドの作成：市民との変化のための対話（Making a community information guide using the iPad application "PeKay": Dialogue for change with citizens）、同志社女子大学の村木美紀先生による「マンガ」を参照するためのツール：データベースの検証とその実用化（Tools for references of "Manga": Verification of Database and its practical use）、同志社大学の佐藤翔先生、原田隆史先生、および大学生六名による図書館設計をテストするためのバーチャルリアリティシステムの開発（Development of VR system for testing library designs）、そして、鶴見大学からは、元木章博先生による日本の図書館経営が開始した情報アクセシビリティの事例報告、同大学院生の星野ゆう子氏による日本とアリゾナの障がい者向け図書館サービスの比較（Comparison of the library services for the handicapped in Japan and Arizona）、私と共同研究者である国立情報学研究所、国立研究開発法人物質・材料研究機構、国家科学図書館・中国科学院の研究者四名によるバイオアーカイブにおける投稿文献の現状と流通分析（Current status and flow analysis of posted papers in Biorxiv）となり、日本からの発表七件のうち三件が鶴見大学からでした。私のテーマは社会に研究成果を速く伝える手段を考察することです。学術雑誌は同僚（ピア）の批評（レビュー）する制度である査読（ピア・レビュー）によって掲載する文献の質を保っています。ところが査読に半年から一年以上かかることもあり、研究を社会に発表する長期化の一因にも成っています。そこで、草稿をウェブで公開し、広く社会で活用できるようにする制度を文献のアーカイブと呼びます。これにより貴重な研究成果を迅速に伝え、科学の発展が加速することが期待されています。最後になりましたが、受講生の皆様が、図書館や図書等に係る仕事に就かれ、さらにご活躍されますことを期待しております。



ポスター発表会場の様子

私が出会った世界の図書館人（としょかんびと）たち

日本図書館協会
児童青少年委員会委員
依田 和子

２００５年から２０１３年までＩＦＬＡ（世界図書館連盟）児童・ヤングアダルト分科会の常任委員をしていました。委員として世界各国の図書館員たちに出会うまでは、自分が大学で児童サービス論の授業をするなど考えたこともありませんでした。各国の図書館員と交流した中で、一番に思い出すのは、デンマークのＫさんとの会話です。

IFLA児童・ヤングアダルト　メンバー
2012　プレ大会フィンランド・ヨエンスー
The World Through Picture Books 第1回展示

夏に開催される年次総会前の3月頃に分科会常任委員だけの会合が開かれることが多く、参加人数も7・8人前後と少ないので、委員同士の交流も深まるいい機会となります。ある年のミッドイヤーミーティング（通常こう呼んでいます）で、私は本で得た知識をもとに、Ｋさんに「北欧の図書館は、すばらしいサービスをしていて羨ましい」と話しかけました。大会のたびに図書館を見学し、スウェーデンとノルウェーの図書館数館を訪問したことがあったので、その時の率直な気持ちを伝えたのです。

すると、意外な言葉が返ってきました。国の財政状況が悪化して経費・人員削減の方針が出た時、図書館員全員で話し合って、それぞれの個人的事情も考慮しながら対応した結果、現在のように世界の人々から羨ましいと言われるような図書館になったこと。残った職員たちは必至でサービス向上に務めたこと。辞めていった図書館員も含めて関係者全員が力を合わせたおかげで今があること。などを淡々と語ってくださったのです。現状に不満や要望がある場合には、まわりの人達の賛同と協力を得て自ずから動くことが必要であると痛切に感じた瞬間でした。

常任委員会で私が発した一言が、その後大きなプロジェクトになった例もあります。

１９９８年から地元の「あーすぷらざ」という施設でおはなし会を週１回開いていて、運営主体の神奈川県から、名称にあるように世界を対象にした内容にしてほしいとの要望が当初から出されていました。そこで、２０００年から「絵本で知る世界の国々」という企画を立て、世界を８つの地域に分け、毎年夏に６日間該当地域の作家・画家の著書３００冊程を展示し、毎日２回ブックトークをしていました。この企画では世界を２周し17回目は世界中の国々を対象としました

一番困ったのは情報と本集めでした。身近な横浜市立栄図書館から必要冊数を団体貸出として借りられることになりましたが、英語以外は原書も翻訳された絵本も手に入れるのが難しく、東欧の絵本などは国際子ども図書館からガラスケース内に展示するという条件付きで貸出を受けたこともあります。各国の絵本の出版情報が知りたいと２０１０年のミッドイヤーミーティングで発言したところ、最終的には図書館員が選んだ自国の作家による絵本10冊を２セットずつ出版社に寄贈してもらい、日本の国立国会図書館国際子ども図書館とフランスの国立図書館が１セットずつ所蔵し、希望する世界各地の図書館および関連施設へ貸し出す企画となりました。日本セットは「絵本で知る世界の国々―ＩＦＬＡからの贈りもの」として、アジア・オセアニア地域・日本国内を年に４・５か所巡回しています。現在43の国と地域が参加し、３６５冊の絵本が世界を巡っていますが、この企画が実現したのはイギリスのＡさんとフランスのＢさんの大奮闘が実を結んだ結果です。勿論ＩＦＬＡ児童・ヤングアダルト分科会常任委員と世界の図書館員たちの協力がなければ実現しなかったことは言うまでもありません。

振り返ってみて、当時児童青少年委員会担当だったＳさんが日本図書館協会の委員、またＩＦＬＡの委員へと私の背中を押してくださることがなかったら、そして「むすびめの会」のＨさん、鶴見大学のＨさんと出会わなかったら、鶴見大学で教えることもなかっただろうと考えると、図書館人のつながりの強さを感じてしまいます。

これからは１９９５年に友人達と設立した「よこはまライブラリーフレンド」の活動を続けつつ、図書館員を目指している人たちを応援していきたいと思っています。

「絵本で知る世界の国々」展示会場
あーすぷらざ　2015

理念あっての図書館です！

関東学院大学 教授
中村 克明

私は今から34年前、同じ大学の院生４人とともに、巣鴨にあるＴ大学の司書講習に参加しました。大学の学部時代、何の資格も取らずに卒業した私は大学院ではまず司書の資格を取得したいと考えていました。ところが、入学初日のオリエンテーションで、院生は司書資格を取れないと聞き、あわてて講習会を開催している大学を調べ、Ｔ大学を選んだというわけです。

当時、私が住んでいたのは茨城県でしたが、出身が長野県だったもので、高円寺にあった長野県人の学生寮に頼み込んで、２か月間（８～９月）部屋を借り、休日を除いて毎日、大学に出かけました。司書に関する本はそれまでにも何冊か読んでいましたが、実際に図書館の講義を受けるのは初めてでしたので、特に参考業務（今でいうレファレンスサービス）や資料整理（目録、分類）は苦労しました。今でこそ、私は情報資源組織（資料整理）の教員として受講生の皆さんに講義をしていますが、分類等を学び始めた頃はその適用規則が分からず、とんでもない数字を並べてしまい、よく人に笑われたものでした。また目録規則も、できたと自分では思っていたのに、細かな規定を見落としてしまうことがよくありました。参考業務の演習に至っては、もうさっぱり訳が分からず、お手上げ状態でした。

ただ、今日から考えれば、この時ほど集中して図書館情報学に打ち込んだ時はなかったように思います。確かに、２か月間は大変でした。でも、この時に学んだことが現在に生きています。この経験は非常に貴重でした。諸先生方、職員の方、またこの時に出会った皆さん方に深く感謝しています。

ところで、図書館情報学は実戦の学問ですが、だからといって図書館の〝技術〟だけ学んでおけばそれでいいというものではありません。とりわけ、公立図書館は社会の一組織ですので、社会や政治の動きと全く無関係という訳にはいきません。したがって、公立図書館は社会の動向にそれなりの影響を受けることになります。また他の種類の図書館も、大なり小なり影響を受けることは必至です。

しかしだからといって、では社会の動きにそのまま従うのが図書館のあり方かというと決してそんなことはありません。やはり、図書館は「図書館の自由に関する宣言」に述べられているように、自立した存在として外部からの圧力に屈するようなことがあってはなりません。真理を追究し、世界平和に貢献するのは、何も国立国会図書館だけではありません。この〝理念〟は、すべての図書館に共通するものだと思います。ですから虚偽が蔓延し、平和を脅かすような社会的動向に対しては、図書館員は毅然としてこれを否定し、知る自由、表現の自由を守るべく、積極的に活動しなければなりません（アメリカ図書館協会の活動が参考になるでしょう）。

図書館員を目指される方には、ぜひこのことを心にとめておいていただきたいと思います。戦前、日本の図書館は大きな過ちを犯しました。過ちは二度と繰り返してはならないでしょう。「図書館の自由に関する宣言」にも書かれているように、戦前の図書館は「思想善導」の機関として、国民の知る自由を侵害する役割を果たしたのです。図書館員を目指す皆さんは、この苦い経験を絶対に忘れてはいけません。平和で、平等で、差別のない社会・国家を形成するための社会的機関が図書館であり、またそれを支えるのが図書館員なのです。図書館関係者は、図書館をまさに人権と平和の砦にしようではありませんか。新しく図書館情報学を学ばれる皆さんの活躍を祈念いたします。

受講生 司書

胸に「小さな図書館」を

柴田 友佳

社会人となってから、多忙な日々を駆け抜けていた私は、ふと、自分や周囲のことを顧みる心の余裕を失っていることに気が付きました。学生時代、多くの時間を図書館で過ごしていた私は、読書や作文などを通して、そこで語られる世界観に没頭したり、自分の言葉で文章を紡ぐことに夢中でした。そうした自己探求の経験が、人の内面を強く育てるものだと考えていた私は、今一度、自分を見つめ直すためのヒントを得たいと思い、この司書講習の扉を叩きました。新たな学問や多くの人との出会いの中で、とても充実した日々を送ることができました。心から感謝しております。

さて、人生100年時代と言われる現在、生涯学習に対する人々の期待はより一層の高まりを見せています。何歳になっても学び続けたいという思いを受け、日々懸命にサービスを提供する図書館の姿は、今日多くの人の活力となっているに違いありません。また、未来に目を向けると、生涯学習の拠点を担う図書館は「場」としての機能がますます重視され、あらゆる人的サービスが展開される一方で、デジタル情報資源の需要拡大によるデジタルライブラリー化に向けた動きが活発化していくでしょう。二律背反のことのようですが、そのどちらも図書館のサービスを利用者に確実に届けるためになくてはならない大切な事業です。図書館の在り方が大きく変わろうとしている今、職員一人ひとりが今後果たすべき役割について考え向き合うことは、大変意味のあることだったと思います。

図書館は社会を構成する一要素として周囲の人々と支えあい、協働し、この共同体をより豊かなものにしていく役割を担っています。また同時に、相手の立場や個性を重んじ、相手のために心を尽くすライブラリアンや図書館サービスの在り方は思いやりの精神そのものと言えます。今後参画する社会の中で、私なりの真心を還元していきたいと思います。最後になりますが、連日猛暑に見舞われる中、貴重な講義を実施してくださった先生方、並びに事務局の皆様、そして、2か月間を共に乗り越えた受講生の皆様、本当に有難うございました。皆様の今後の発展と幸せを心より祈願しております。

受講生 司書

司書への第一歩

加藤 匠

「平成最後」という言葉がどこへ行っても目に止まるような日々から、元号は「令和」に変わり、これまでの生活とは違うどこか自分自身も生まれ変われるような気持ちを抱きながらこの夏を迎えました。人生にはいくつかのターニングポイントがあると言われますが、私にとっての転換期はまさに「図書館員」という仕事との出会いだったと思います。

私は鶴見大学の卒業生で、在学中は図書館員を目指すことは考えておりませんでした。けれど大学卒業後「図書館員」という職業に出会い、図書館で働く楽しさに魅せられました。これから先長く図書館で働くと決意した際、日々の業務で「もしこの知識があれば」「この仕組みが分かれば」といった知識や技量不足を感じるようになりました。そのため、自分自身ができる利用者へのサービスの向上や図書館業務への知識をより深いものにしていきたいと考え、職場からの後押しもありこの夏講習を受けることになりました。

不安や緊張を抱きながら迎えた講習序盤は座学が多く、大学生に戻ったような気持ちで取り組みました。課題なども多かったのですが、基礎的な知識を固めることができたりサービスそのものの意味を再確認できたりと職場では学びきれないものをしっかりと吸収することができました。

終盤に差し掛かると実習が増え、応用的な講義が増えました。序盤からの講習で学んだ知識をアウトプットしていく講義です。事前に講習を受けたことのある職場の人から「図書館に毎日残って勉強していた」と言われ覚悟をして望んでいたものの、課題の多さは山場を超える山場と言っても過言ではなく人生で一番勉強した期間となりました。

この講習を乗り越えられたのは、全体を通して様々な分野で活躍されている沢山の先生からの豊富な知識と人を惹きつける巧みな話術による講義と、図書館に行けば真剣に課題に取り組む同期の方々からの刺激のおかげです。朝から夜までびっしりと入った内容の濃い講習を越え、達成感と講習前の自分とは違うパワーアップした自分がいます。本当にありがとうございました。

受講生 司書補

学ぶことは素晴らしい

有賀 雅子

「学ぶことは素晴らしい」日々、仕事・家事をこなしていくだけで、精いっぱいだった私にとって、司書補講習を受講することができたこの夏は、このことを再認識できた貴重な1か月半となりました。

昨年4月から図書館に勤務し、より良いサービスを行うため、司書補の資格取得を目指すこととなりました。「より良い」の中身は曖昧なままのスタートでした…。

学生時代が、はるか昔となった私は、体力的に片道1時間半の通学を続けられるか、講義の内容を理解できるのかについて、不安に思い、司書補を目指す決心をしたことを後悔したこともありました。

しかし、こうして講習を終えることができたのは、受講生を、なんとか一人前の図書館員にしてあげたいという、先生方の熱く、やさしい思いに支えられたからだと思います。

先生方は本当に個性豊かでした。講義は、それぞれに工夫され、先生方の様々なエピソードや経験談が盛り込まれており、楽しく受講することができました。そしていつの間にか、図書館学の奥の深さに引き込まれていきました。この講習の中で私にとって一番の収穫だった事は、図書館という存在が、社会の中の、様々な面において重要な役割を担っていると学べた点です。「より良い」サービスを提供するということは、この役割をしっかりと行っていくことだとわかりました。図書館で勤務していても気づかなかった多くの教えを、これから自分のものにして、活かしていきたいと思っています。

とはいうものの、毎時間知らないこと、大切な内容のオンパレードに、集中力が切れ、思考停止状態になったこともありました。インターネットはそこそこ使えていると思っていたことが、全くの思い違いだったと気づかされたり、ノートを取ることすら満足にできなかったりと、自分の能力不足に呆然としたこともありました。そんな時は、一緒に受講した皆さんに教えていただき、大変助けられました。また同じ職場から受講した同僚の存在は大変心強いものでした。皆さん本当にお疲れさまでした。そして、ありがとうございました。

受講生 司書補

思った事、思い出した事

鬼頭 光司

司書補講習に通うことを決めた。通っていた高校から卒業証書などの必要書類を集め、身銭を切り応募をしたところ、受講の選考に合格した。さらに身銭を切ることになったが、無事に開講式へと向かうと、司書・司書補を合わせて約百人の受講生がいた。「図書館の就職は倍率が高い」とどこかの雑誌かニュースで見たような気がして、それを思い出した。

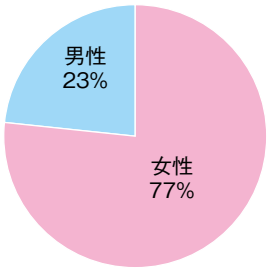
今年も暑い夏だった。司書補の受講ができる最寄りが鶴見大学だったので、一ヶ月半、毎日片道が一時間半の道のりを電車に乗って鶴見大学へ通った。さらに、一時間半の講義（コマ）が一日平均で四コマだった。司書補の受講生は約三十人で仕事も年齢も様々な人がいた。ぼくは内気で他の受講生と積極的に仲良くはなれなかったが、いくつかのグループが出来ていた。また、図書館員の経験のある受講生もいて羨ましく思った。ぼくは図書館で働いたことが無いので、実は話をしてみたかった。詳しく図書館の現場というものはどうなのか聞きたかった。

講習を受けて、様々な点から図書館の基礎を学んだ。まだ、講習が終わって二、三日しか経っておらず復習は出来ていないが、思い出してみると、生涯学習としての図書館、関係する法令から現在までの歴史（外国も含む）、図書館サービス、資料の整理（目録、分類）、情報検索（多様な検索ツール）、レファレンス、児童サービス（読み聞かせ）、古典籍についてなど、多岐に渡る事を学んだ。さらに、図書館で働く事についての視点や運用に関する見識がある事を知り、やはり図書館で働きたいと思った。また、基礎を学ぶと、具体的にどんな図書館でどう働きたいのか、というイメージが付いた。それは、各図書館の専門性を学んだということでもあり、就職活動のヒントの一つになるのだろう。

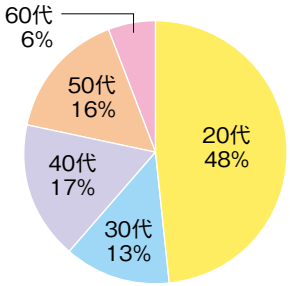
司書補の講義が終わり、あとは閉講式と合否の結果、さらに就職活動といろいろ不安を感じる事もあるが、鶴見大学の司書補講習に何とか通えた。知識としての図書館を学び面白みを知ったが、現場としての図書館をもっと知りたい、働きたいと思った

令和元年度司書講習 アンケート集計結果 （回答数／受講数＝55名／69名）

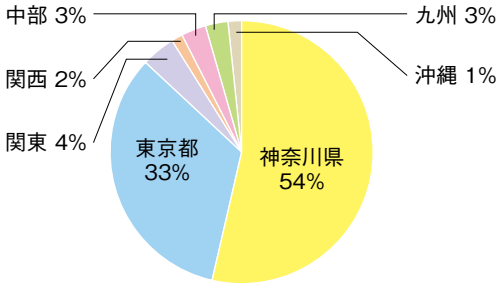
男女別データ



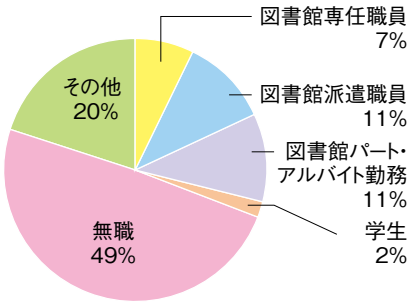
年齢別データ



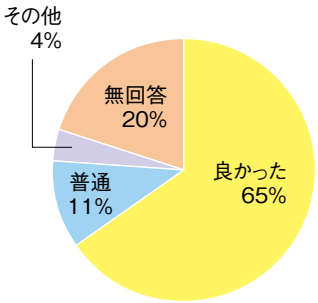
出身県別データ



職業別データ



特別講座について

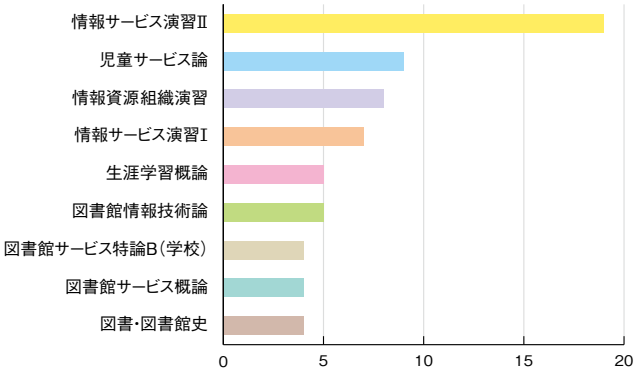


【主な理由】

良かった…

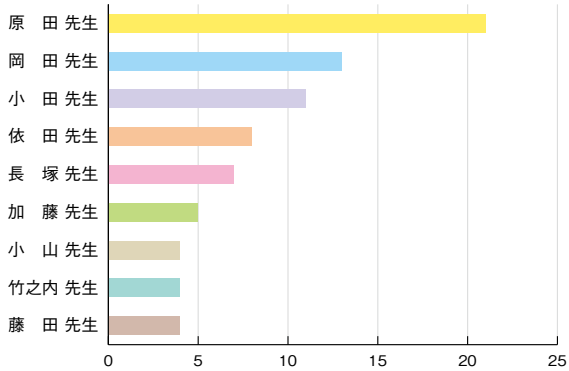
- 図書館サービスの新しい在り方について、いくつもの事例を示しながら解説してくださり、非常に分かり易く、今後のサービスを前向きに、その可能性に期待して検討することができました。新たな着眼点から、図書館サービスを立案していけたらと思います。
- 新鮮な事例を多く紹介いただきました。
- 図書館の空間をコーディネートすることでより多くの人に利用される施設になるとのことで、そういう知識をたくわえたいと思いました。
- 課題解決支援について、具体的な事例をたくさん紹介して下さって興味深かったです。
- これからの図書館のあり方や司書の役割を改めて感じた。

印象に残った科目（上位9科目／複数回答）



- 情報サービス演習Ⅱ…今回の司書講習の内容を全て詰め込んだような科目でした。多くの課題に受講生の皆さんと取り組み、図書館内を何周もして、汗をながしたことは、とても印象に残っています。この科目で学んだ調査への姿勢は、実務でも忘れずに活かしていきたいと感じました。
- 児童サービス論…講師の先生による多様な絵本の紹介や受講生による実習で、たくさんの素敵な絵本(児童書)に出会うことができたため。大人になってからは、小説を読む際もストーリーを追うことばかりを重視して、細やかな描写や表現にじっくり目を向けることはとても少なかった。本講義を受講し、作者・著者の紡いだ言葉のひとつひとつをじっくり味わうことの大切さに気づくことができた。
- 情報資源組織演習…最初の演習だったので印象に残った。この科目はもっと時間を増やして欲しいと思った。始業前も終了後も休み時間も受講生は理解しようと取り組んでいた。
  分類の知識を解りやすく教えて頂き、基礎が理解できました。
  数学が好きなので、規則に従って式を書くように書誌的事項を書くのが楽しかった。

印象に残った講師（上位9名／複数回答）



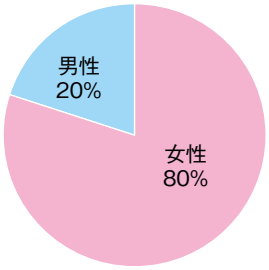
- 原田先生…豊富な知識を適確に伝えてくださいました。学生に力を付けてもらいたいとの思いが感じられました。質問したことにとても丁寧に回答してくださり、講義も内容は難しかったのですが、熱心に教えてくださるので私も一生懸命覚えようと思えました。外国の話も自分では行ったことがないので、とても楽しかったです。
- 岡田先生…とても楽しい授業でした。図書館の話や、先生のお話まで、いつまでも聞いていたいと思いました。図書館の歴史から、目録・分類までたくさんのことを一生懸命教えてくださっていた姿が今でも印象的です。授業やテストが続く中で、目録や分類等について教わりながら先生自身の人柄に癒され楽しく受講ができました。
- 小田先生…一方的な授業ではない受講生参加型の形式で進めて頂いたので、教えてもらった内容を自分自身で考えることができた。学んだあと考えることにより、より理解を深めることができた。現場で働く視点から、図書館を様々紹介してくれ、図書館を比較したり、見学の仕方のイメージを湧かせることができました。
- 依田先生…児童サービスについてボランティアや協力会の立場から、お話を聞けたのが楽しかった。読みきかせなどの実習も楽しかった。

感　想

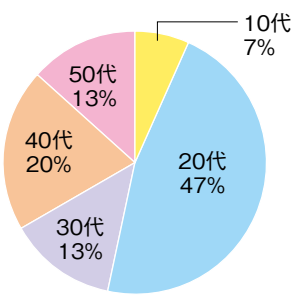
- とてもレベルの高い授業で、どの先生もていねいに教えて下さり、受講するのが楽しかったです。自分が働いている図書館において進んでいる分野や遅れている分野にも気付くことができて、今後に活かそうと思いました。
- 鶴見大学司書講習は、長く伝統ある講習なので、自分がついて行けるか不安でしたが、素晴らしい講師の先生方の授業が受けられて幸せでした。図書館の情報がたくさん聞けたのは、私の人生で本当に有意義なし2ヶ月でした。体調管理が大変でしたが、休まず学べやり遂げた事は、今後の自分にとって自信につながると思います。これからも生涯学習に向けて、健康で充実した時間を築いていきたいと考えます。本当に先生や職員の方、スタッフの皆様にお世話になりました。ありがとうございました。
- 同じ資格の取得を目指す皆さんと約2ヶ月間講習を受講して、グループワークや休憩時間の中でお話をしたことも、とても印象に残っています。皆さんがそれぞれしっかりと自身の考えを持っていて、それを聞くこともとても楽しく、また自分の考えを話す機会も普段の生活ではあまりないので、話すことも楽しいと感じました。この出会いも私の人生において財産になるだろうと思っています。
- とても楽しく通うことができました。雰囲気が良いです。
- 図書館の資格取得は、未知の領域で、受講生はわりと現職方が多かったので、自信がなかったけれど知識ゼロの状態から、割とついて行けたと感じる。仕事を実際にしてみて、いままで学んだ知識を生かしたいと思った。
- 事務の方もたいへん丁寧で、どんな質問にも答えて下さり、ありがとうございました。ツイッターもいつも楽しく読ませていただきました。

令和元年度司書補講習 アンケート集計結果 （回答数／受講数＝14名／30名）

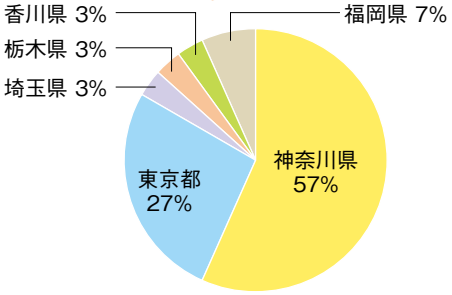
男女別データ



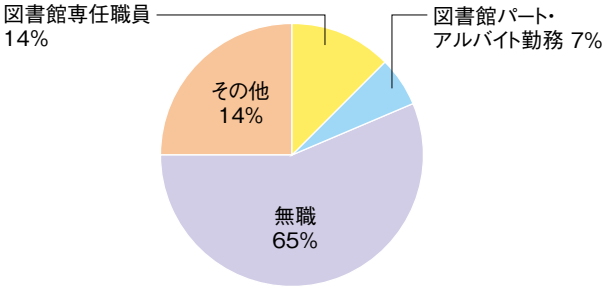
年齢別データ



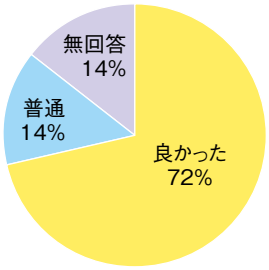
出身県別データ



職業別データ



特別講座について

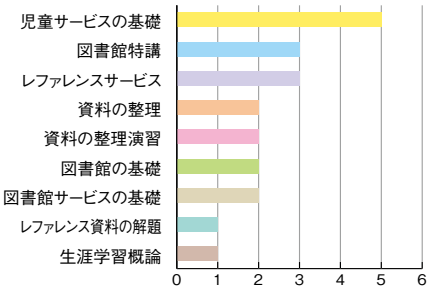


【主な理由】

良かった…

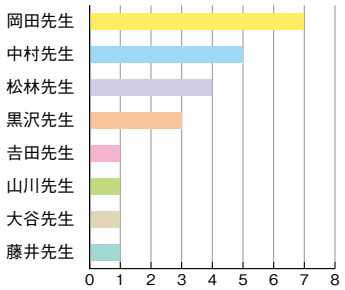
- 図書館の多様な可能性を知ることが出来、勉強になりました。がんについて特化した図書館の映像は素晴らしかったです。
- 公立図書館で勤務しているので、サービスについてのこと等、工夫も大事であり、今後の参考にしていきたい。
- 図書館と人との関りを改めて考え、自分に何ができるかどうしたいか、関係者の視点を見つめていきたいと考えさせられた。
- 空間利用のはなしが興味をもてました。本の福袋もただのイベントではなく、館の力が試されていると知り、驚きました。
- 全国の図書館の取り組みが聞けておもしろかった。いろいろ取り組んでいるのだなと思いました。

印象に残った科目（複数回答）



- **児童サービスの基礎**…児童目線での物の捉え方が新鮮で思いもよらず興味深かったです。未来へつながる児童達への教育に本はとても大切で、そのサービスを学ぶ事は重大なことと思いました。
- **図書館特講**…先生の古典籍への愛情があふれていて、普段かな文字だけの書籍からはなれていた私にも、学生時代の楽しさを思い返すことができました。国際子ども図書館でも先生の持っていた本と同じタイプの本をみて、今ある本と同様に身近に感じることができました。巻子本や古典籍に触わる機会はめったにないので貴重な本に触ることが出来てよかったです。
- **レファレンスサービス**…与えられた課題が難しく、回答するのに時間がかかりましたが、マンツーマンで先生に熱心に教えて頂き、アドバイスを頂きながら、なんとかOKを頂きました。大変でしたが、1人でレファレンスに取り組んだのが初めてだったのでとても印象深いです。

印象に残った講師（複数回答）



- **岡田先生**…授業の中でのお話（難しい話ばかりでなかったこと）と、話し方が印象的でした。授業の内容は難しいのですが、もっと聞きたくなるような授業でした。
- **中村先生**…授業もわかりやすく、時々話してくれる先生個人のお話も楽しく、とても良い授業を受けることができました。先生の授業内容は大切な部分を適切に、ピンポイントで教えてくれるので、理解しやすく助かりました。
- **松林先生**…ノートをとるのがとても大変でしたが、なんでもはっきりとわかりやすく教えていただけたので、印象に残っています。
ご自身の図書館利用体験や現在の大学での授業風景なども楽しくおはなししてくださり図書館運営に興味をもつ時間となりました。

感　想

- 色々とお世話になりました。先生方には熱心に講義をしていただきました。事務の方々やパソコンの宮嵜先生にもお世話になり感謝しています。
- 忘れ物をした時、事務の方に丁寧に対応していただきました。ありがとうございました。
- 図書館司書補としてこの講習で学んだことを忘れずに仕事に臨みたいです。
- 現在公立図書館で勤務する上で、基本的な考え方となる。図書館の役割について学ぶ事ができてとても良かった。
- 利用者としての図書館のつかい方とは全く世界が違いました。あつい夏は大変でしたが、無事に終了できたのも事務室のみなさんのおかげです。ありがとうございました。
- 先生方がみなさん個性的で飽きることなく授業を受ける事ができました。親身になって質問に答えて下さる先生に、熱くご教授いただき、やる気もわきました。

司書・司書補講習の歩み

鶴見大学の司書・司書補講習は、昭和29年（1954）に開講しました。その間、著名な多くの先生方のご指導の下、優秀な修了生を輩出し、本学の講習は成長してまいりました。そして、開講時の昭和29年に講習生の会として「一夏会」が発足したのがこの会報の由来となっております。

平成9年には大学会館での講習がスタートし、JR鶴見駅から徒歩3分という恵まれた環境で講習を行うことができるようになりました。約60台のパソコンからなるOA研修室や80万冊にも及ぶ質の高い蔵書群を所蔵しコンピュータを駆使した高度な情報提供機能を持っている本学図書館の使用など、時代のニーズにふさわしい講習を行っております。

本学司書・司書補講習は、これらの歴史と数多くの優秀な修了生を誇りに今後ますますの発展を期して努力してまいります。

司書・司書補講習受講生の皆様へ

アンケートにご協力いただきましてありがとうございました。皆様のご意見を参考に、今後もより良い講習にしてゆきたいと思っております。また、この「一夏会報」を刊行するにあたり原稿をご執筆いただきました先生並びに受講生の方々に深く感謝申し上げます。真夏の暑い中、2ヶ月間お疲れさまでした。

今年は図書館総合展のポスターセッション出展のために、アンケートや写真にもご協力いただきありがとうございます。11月の総合展にお越しの際には、お声がけいただけますと幸いです。